

祈りの台座の答えを探す

木内鶴彦著「臨死体験が教えてくれた宇宙の仕組み」（晋遊舎）の中につぎのような記述があるそうだ。

（転載開始）

中国での臨死体験の最中、私は地球で生命が誕生したときまでさかのぼってみました。放射線のスパークが起きたり、放射線をえさとする生命体が生まれたり、単細胞から多細胞へ生命が進化していく様子を見てきたのですが、そのとき記憶がよみがえったのは、22歳のときの臨死体験で垣間見た原始の地球には月がなかったということです。

私は星の観測を専門にやっているのですが、どうしても月の存在が気になります。というのも、月の成立にはいろいろな説があって、太陽系ができたときに地球の兄弟星として一緒にできたという説や、地球から分離して生まれたという説、惑星が地球の引力に引き寄せられて月になったという説などがあって、いまだにどれが正しいのか、結論が出ていないのです。

22歳の臨死体験のときも私は過去に戻って、月の存在を確認しました。すると、かつての地球には月がなかったのです。それどころか、月ができたのはつい最近、いまから1万5000年ほど前になるようです。**月がない時代、地球の大陸はいまよりずっと大きく、海は地球の3分の1くらいしかありませんでした。**

当時、人間はすでに高度な文明を築いていました。地球の環境を破壊しないよう、自然と共生しながら知恵と哲学と技術を持って暮らしていました。

ところがいまから1万5000年前に巨大彗星が太陽に近づくという恐ろしいことが起きました。巨大彗星の内部には圧力によって結晶化された大量の水や氷がたくわえられていました。それが太陽の熱で一気に溶かされたために、莫大な水蒸気が発生したのです。地球の軌道がそこに近づいたとき、**気化した水蒸気は地球の引力に引っ張られ、大量の水分が地上に降り注ぐことになりました。**

地上の多くは海の中に沈み、高度な文明も滅びてしまいました。アトランティス大陸の消失やノアの大洪水などの伝承が残っているのも、このときの洪水が物語として伝えられているからではないでしょうか。

そして軽くなった巨大彗星は軽石のような塊となり、地球の重力に引っ張られて、地球の周りを周回する衛星になったのです。それが月の正体です。

月は地球の環境を激変させ、多くの生命を滅ぼした巨大彗星の名残だったわけです。

しかし、もともとの地球には月はなかったという私の説はなかなか信じてもらえませんでした。そこで私はいくつか証明する手がかりを示すようにしています。

たとえば動物が持っている体内時計がその一つです。太陽がのぼってきて沈み、また

のぼるまでの周期を1日といいます。時間でいえば24時間です。

しかし、人間も含め、地球上のすべての生き物が持っている体内時計はみな25時間です。なぜでしょうか。そこで私はもし月が存在せず、地球が月の引力の影響を受けなかったら、1日は何時間になるのか計算してみました。するとちょうど25時間になりました。生き物が持っている体内時計と見事に一致します。

このことから、地球の1日は長らく25時間だったのではないかと推測できます。

また地球上で、月の通り道にあたる白道（太陽の通り道は赤道）上に砂漠が点在しているのも偶然とはいえません。月の軌道上では、大量の水が降り注いだに違いありません。石や岩は細かく砕け、山は平坦になり、木々はなくなって、砂漠になってしまいました。だから月の軌道上に転々と大洪水のあとの砂漠が点在しているわけです。

さらに決定的な事実があります。地球上に存在した巨大な恐竜たちの存在です。もし地球がいまと同じ質量を持っていたとしたら、重力は質量に比例しますから、あの巨大な恐竜たちは自らの重量によって歩くこともままならなかったはずで

す。ティラノサウルスを例のとりと、いまの地球の重力なら時速15キロで歩くのが精一杯だったでしょう。ところが、さまざまな検証からティラノサウルスは時速60キロ以上の速度で移動し、獲物をしとめていたといわれています。

なぜあれだけの巨体で、そんなスピードが出せたのでしょうか。それは地球の質量がいまよりずっと軽かったからです。なぜ地球の質量は軽かったのか。そしてなぜいまは質量は重くなって、昔より重力が増えてしまったのか。

その原因が何だったのかというと、地球上で海が増えたことしか考えられません。つまり月の出現による大洪水によって、地球の3分の2は海になってしまい、その分の水の質量が、地球を重くした原因になったのです。

（転載終了）

木内氏はこれまでに2度臨死体験をしたという杞憂稀な人なのだが、それよりも私が注目したのは、かつての地球には月が無く、それどころか海は地球の3分の1ぐらいしかなかった、巨大彗星が近づき、太陽に熱せられ気化した水蒸気が地球の引力によって吸い寄せられ、その水蒸気が再び水となり現在の地球の海（の量）を形成したということだ。

ということはかつての祈りの台座は現在のように海中ではなく、陸地にあったこととなる。それは祈りの台座はもちろんのこと、（白石の鼻の）三石さえも陸地にあったのではないだろうか。もしそうならば白石の鼻は陸地にあった観測所となる。春分秋分共に岩の間を通り抜けた光が陸地を這うように光が走ったことだろう。そして夏至の日は三つの岩の間を通り抜けた光は直接私たちの体に届けられたのかもしれない。